

# 個に応じたキャリア教育を実現するための ファカルティ・ディベロップメントの取り組み

玉田 和恵\* ・ 神部 順子\*\*  
海老澤邦江\*\*\* ・ 古里 靖彦\*\*\*\*

## 概 要

本研究では、学生の人間力と、本人の望む就職を実現するために必要となる問題解決力を育成することのできるキャリア教育カリキュラムの開発を目指して実践を行った。特に個々の学生に応じた指導と、情報文化学科の学生に特化したキャリア教育の実現を目指した。実践について「基礎学力の向上」「個に応じた対応」「リーダーの育成」「学内企業セミナー・企業講演会」「企業見学」「インターンシップ」の観点から成果と今後の課題を論ずる。

## 1. はじめに

### 1.1 背景

大学審議会の答申がはじめて「ファカルティ・ディベロップメント」(FD)という用語を使用したのは平成3年2月の答申「大学教育の改革について」である。そのなかで、大学教育改善の基本的考え方として、「学生の学習を充実させるために、教員の教授内容・方法の改善への取り組み(ファカルティ・ディベロップメント)を積極的に推進する必要がある」と述べている。それ以来、多くの大学でこれらの取り組みがなされている。ファカルティ・ディベロップメントとして、学生に対して直接教育活動を行う教員が、自らの教授能力を向上させるために不断の努力を重ねることにより、学生の学習意欲を喚起するような授業を展開していくことは重要である。しかし、個々の

教員の自助努力には限界があるため、大学あるいは学部、学科としての教育目標を明確にし、その目標を実現するための視点から、教育課程を編成し、組織的に取り組むことが最も重要である。

現在、各大学において、ファカルティ・ディベロップメントについてはさまざまな取り組みがなされている。平成9年度に193大学(全大学の約33パーセント)での実施であったが、平成18年度には628大学(全大学の約86パーセント)と取り組む大学が着実に増加している。取り組みの内容を詳細に見てみると、「講演会等の実施」が最も多く、次いで、「教員相互の授業参観を行った上で授業内容・方法について討論を行い検討を深める」「授業の運営方法について新任教員に対する研修会を開催する」「授業内容・方法についての恒常的な検討組織を全学的に設ける」などである。取り組み内容を検討すると、これらは全て個々の教員の授業内容・方法の検討に終始しており、学部あるいは学科が最終的に輩出したい人材像を明確にして、全体のカリキュラムを検討するという視点から行われている活動はあまり見られない。

2008年11月28日受付

\* 江戸川大学 情報文化学科准教授 教育工学

\*\* 江戸川大学 情報文化学科准教授 情報科学

\*\*\* 江戸川大学 情報文化学科教授 イギリス詩

\*\*\*\* 江戸川大学 情報文化学科教授 e-ビジネス

一方、産業・経済の構造的変化、雇用形態の多様化・流動化などを背景として、ニート、フリーターの増大が大きな社会問題となっている。これらの問題に対して政府全体として対策を講ずるため、文部科学省、厚生労働省、経済産業省及び内閣府の関係4府省で「若者自立・挑戦戦略会議」を発足させ、平成15年6月に、教育・雇用・産業政策の連携強化等による総合的な人材対策として「若者自立・挑戦プラン」が出され、その後追従するさまざまな施策が実施されている。これにより、小学校・中学校・高等学校・大学におけるキャリア教育の充実が求められ、多くの実践がなされている。

全国の多くの大学では、これらの取り組みを全学的組織である就職支援センター等が担っている(那須2004)。多くの場合、職業意識の啓発、インターンシップ、就職ガイダンス、キャリア相談、就職情報の提供が主な機能となっている。江戸川大学においてもキャリアセンターを中心に、一人ひとりの学生へのきめの細かい就職支援が目指されている。厚生労働省「YES・プログラム認定講座」の実施による1年次からのキャリア教育、各種資格取得への支援、3年次以降に行われる産業特講や就職試験対策など充実したカリキュラムが実施されている。

ただ、全学的組織での取り組みの課題として、個々の学部・学科の専門分野に特化したキャリア教育が実現しにくいという問題と、就職支援センターに足を運んで積極的に情報を収集しようとする消極的な学生を見落としてしまうという問題が存在する。就職を目指したキャリア教育を実現する場合、学生の専門性に応じたキャリア教育を実現することが望ましい。また、多くの大学では、少子化に伴って、多様な学生の入学を許可しているため、個々の学生に対してよりきめの細やかなキャリア教育を実現することが望まれている。

これらの課題を解決するため、本研究では、情報文化学科における最終目標を実現するためのファカルティ・ディベロップメントの取り組みとして、学科の専門性に応じたキャリア教育カリキュラムを検討する。

## 1.2 目的

江戸川大学の教育理念は、「人間としての優しさに満ち、普遍的な教養と時代が求める専門性により社会貢献できる人材の育成」を目指す「人間陶冶(とうや)」である。情報文化学科においても、この精神に鑑み、人として社会で生きていくための「人間力」を確実に習得させることを目指して教育を行っている。本研究の目的は以下の通りである。

- ① 学生の人間力を育成し、本人の望む就職を実現するためのキャリア教育カリキュラムを開発する。
- ② 就職するために必要となる問題解決力を育成するための方法を検討する。

## 2. 情報文化学科が目指すキャリア教育

### 2.1 必要となる3つの視点(心・技・体)

本研究では、情報文化学科でのキャリア教育に必要な視点を図1の3点と考える。就職するという強い意志を持たせ、世の中の厳しさを認識させる「動機付け(心)」、就職するために必要となるスキルを身につける「テクニック(技)」、それから大学で学ぶ上で最も重要な基礎学力・専門性を磨く「自分を鍛える(体)」という3点である。学生が、これらの3点をすべて満たすことができれば、素晴らしい就職を勝ち取ることができるであろう。それを実現するためのキャリア教育カリキュラム試案を作成した。

### 2.2 キャリアカリキュラムの概要

情報文化学科のキャリア教育カリキュラムの概要は表1の通りである。まず、第一に必要な視点は「動機付け(心)」である。「なぜ、自分は大学で学ぶのか」「将来、どのような就職をしたいのか」ということを考えさせ、そのために自分は今、何をしなければならないかということを徹底的に考えさせ、学習への動機付けを図る。指導は個人面談を中心に、1, 2年時は基礎ゼミ

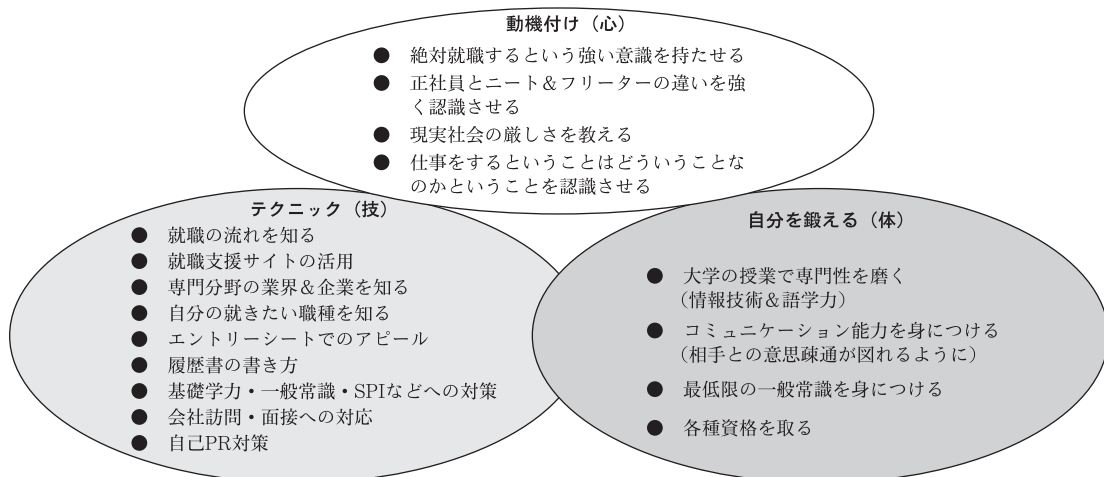


図1 キャリア教育に必要な3つの視点 (心・技・体)

表1 情報文化学科 キャリア教育カリキュラム

	動機付け (心)	自分を鍛える (体)	テクニック (技)
1年 基礎ゼミナール 情報文化基礎	<p>面談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・入学の目的</li> <li>・将来の目標 (どんな仕事につきたいか)</li> </ul> <p>面談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・目標に向かって、勉強できているか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基礎学力を身につける</li> <li>・専門基礎科目で、基礎的な能力を身につける</li> <li>・情報、語学のリテラシ科目で、基礎的なスキルを身につける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・デジタル表現力を身につける</li> </ul>
2年 情報文化演習	<p>面談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>自分の将来像を知る</li> <li>・IT 関連業界人を招いた懇談会 (定期的)</li> </ul> <p>面談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>先輩から学ぶ (就職体験談)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般常識を身につける</li> <li>・専門基礎科目で、基礎的な能力を身につける</li> <li>・情報、語学のリテラシ科目で、専門スキルを向上させる</li> <li>・コミュニケーション能力を身につける</li> <li>・自己分析の訓練</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SPI, 一般常識</li> </ul> <p>模擬テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・引率つき企業訪問</li> <li>・インターンシップ</li> <li>・業界&amp;職種研究のやり方</li> </ul> <p>模擬テスト</p>
3年 専門ゼミナール	<p>面談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・IT 業界人事担当者の話</li> <li>・業界人を招いた懇談会 (定期的)</li> </ul> <p>面談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・最終志望の確認</li> <li>・随時進路相談</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・専門科目で、専門性を磨く</li> <li>・仕事に必要な論理的思考力、問題解決力を身につける</li> <li>・自己分析の訓練</li> <li>・グループディスカッション (集団での問題解決)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>就職活動の基礎知識</li> <li>・エントリーシート</li> </ul> <p>模擬テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・履歴書の書き方</li> <li>・自己PR の訓練</li> </ul> <p>模擬テスト</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・人事担当者を招いて模擬面接</li> </ul>
(目標) ここで、内定			
4年 卒業研究	<p>面談</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・「内定ブルー」対策</li> <li>・職業人としての心構え</li> </ul> <p>面談</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>人間として、社会人として生きていくための力を身につける</li> <li>『人間陶冶』完成期</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仕事をすることとはどういうことか</li> <li>・新入社員の ABC</li> </ul>

ナール, 3, 4 年次は専門ゼミナールの担当者が実施する。2 年次以降には, 将来の職業イメージを持たせるために専門に関連のある業界人や先輩を招いて, 就職への動機付けを図る。

次に, もっとも重要なのが「自分を鍛える(体)」という視点である。情報文化学科の専門である情報技術と語学力を徹底的に学び, 社会で生きていくための力を育成することは, 学科における最重要課題である。情報文化学科のカリキュラムを通じて将来自分の目標とする職業に就くための基礎的なスキルを徹底的に学ばせる必要がある。

最後に「テクニック(技)」という視点も不可欠である。最近の就職活動は複雑化しており, 就職活動の方法を熟知していなければ, いくら専門性を磨いても内定を勝ち取ることが難しい状況にある。そこで, 情報文化学科の学生が就職を希望する業界で必要とされる就職活動のテクニックを学ばせ, インターンシップ等を実施する。

## 2.3 指導前の学生の意識

まず, 具体的な取り組みについて論ずる前に情報文化学科に入学する学生が, 入学時にどのような意識を持っているかを概観する。

### 2.3.1 入学の動機と就職への意欲

「なぜ, 江戸川大学情報文化学科に入学したのか」という問いに対して, 最も多い回答が「情報や語学が好きだから」というものであり「就職するため」というものがそれに次いでいる(図2, 図3)。また, 「情報や語学が好きだから」という回答の内訳を見ると8割以上が情報に興味があるというものであった。2割~3割の学生が「大学ぐらいは出なければならぬと思ったから」という消極的な回答をしているが, 「就職をしたいか」という問いへの回答を見ると, 9割以上の学生が「絶対にしたい」「したい」と回答しているので, 大多数の学生は情報文化学科で4年間学習して, 就職したいと強く考えているようである(図4, 図5)。

就職したい職業は, 第1位が「SE・プログラマ」で, 第2位が「ITを活用した事務系の業務」

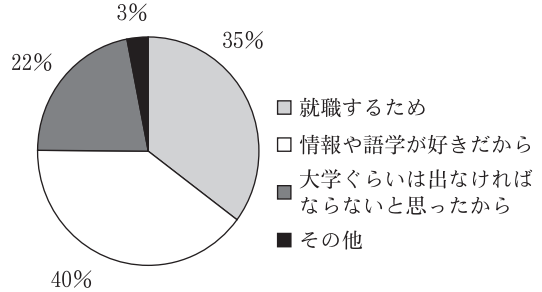


図2 入学動機 (2007 年度生)

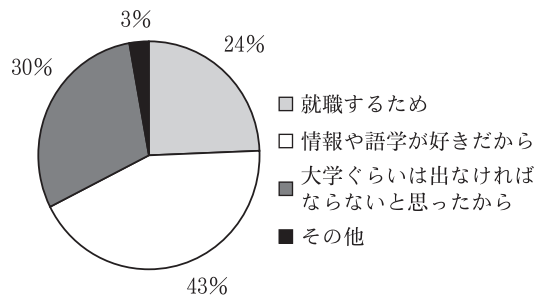


図3 入学動機 (2008 年度生)

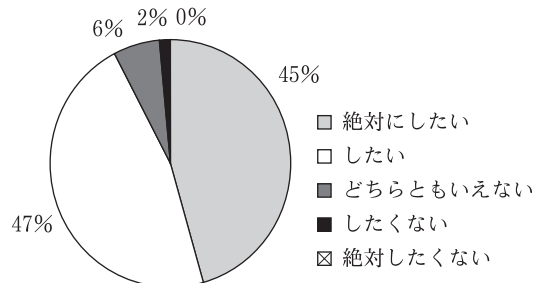


図4 就職意欲 (2007 年度生)

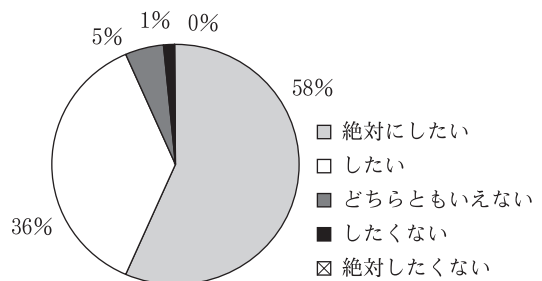


図5 就職意欲 (2008 年度生)

であった。6割以上の学生が, 情報技術を活用した仕事に就きたいという志望を持っている。情報文化学科に入学する学生は, 就職への意欲が強いことがうかがえる。

### 2.3.2 就職への不安

9割以上の学生が就職を強く希望しているが、就職するためにどのような活動をしなければならないか、実際に自分が今何をやっておくべきかということが分かっている学生はほとんどいない。図6、図7のように、今時分がやるべきことが分かっているとはいえない学生が、7割程度である。自分が就職するために何をやっておけばよいかということが分からないため、就職に対する不安は大きい。図8、図9のように、就職に対する不安を訴えている学生は8割程度である。

以上のことから、就職への意欲が高く、情報文化学科の専門性と関連する職業に就くことを熱望している学生に対して、就職不安を軽減し、就職してから困らない技術と就職するためのスキルを身につけさせることのできるキャリア教育の実現を目指す。

## 3. 実践

本稿では、情報文化学科の授業を中心とした専門教育に関する内容の詳細については言及せず、「動機付け(心)」及び「テクニック(技)」の視点に立って、授業外で実践した内容について述べる。

### 3.1 基礎学力の向上

強い動機付けと専門科目の知識や技能があっても、基礎学力がない場合には、就職試験に合格することが困難である。そこで、まず学科全体で基礎学力を向上させるための取り組みを実施することとした。各学年での目標は以下の通りである。

- 1年生：デジタル絵日記(日本語、英語)
- 2年生：一般常識
- 3年生：SPI試験対策

まず、1年生の段階では知識を詰め込むというよりは、楽しみながらデジタルでのデザイン力を向上させることを重視した。また、それに加えて、日本語、英語での文章表現力を身につけさせるこ

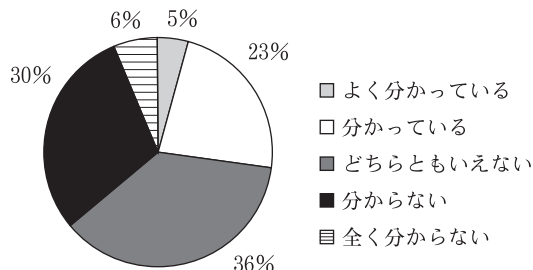


図6 今やるべきこと (2007年度生)

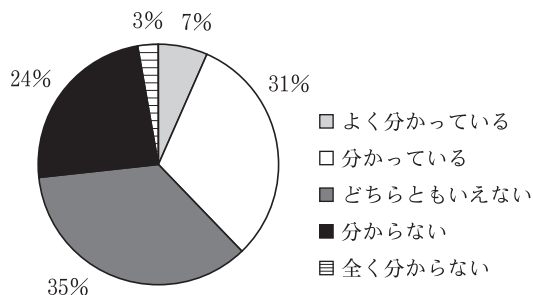


図7 今やるべきこと (2008年度生)

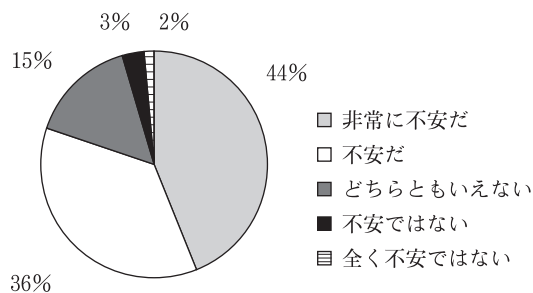


図8 就職不安 (2007年度生)

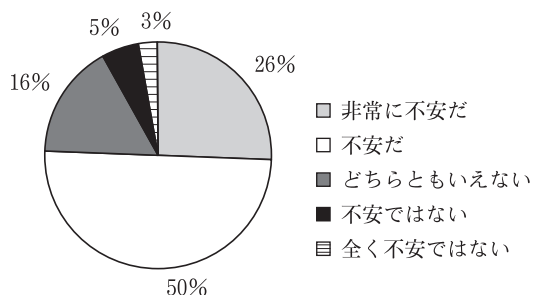


図9 就職不安 (2008年度生)

とを目的にデジタル絵日記の課題を実施した。夏休み中の出来事について、日本語5日分、英語5日分の絵日記を作成し、エドクラテスにアップロードさせた。提出された作品の多くは、授業でテー



マを与えられて作成するものとは違って、独自のアイデアで構成されており、個々の学生の個性が光っていた。教員が考える以上に学生にはデザインや文章に関する秘められた力があり、学生の個性をどう伸ばしていくかということ改めて考えさせられる出来栄であった。

2年生、3年生については、それぞれ一般常識、SPI対策のテキストを配布し、定期的に模擬試験を実施しながら基礎学力の向上を目指した。2年生については、一般常識の模擬試験に加えて、「英語」と「情報基礎（Word, Excel, PowerPoint）」の実技テストも実施した。テストの結果については、個別に弱点を指摘し、今後力を入れるべき点についてフィードバックをした。

2年生の一般常識について、事前（5月）、事後（9月）テストの平均正答率を比較したところ図10の結果であった。取り組みを行う前の5月に実施したテストでは25%であった平均正答率が、取り組み後の1回目のテストでは45%に上昇した。しかし、上昇はしたものの45%という正答率は決して満足のいくものではない。ただ、上位10名の正答率を見ると1位の学生は90%の正答率で、他も皆70%以上の正答率になっている。ここから、やる気のある学生は、非常に努力して高い成果を上げていることが明らかになった。

12月に2回目のテストを実施するが、継続的に努力の必要性を訴えかけて、基礎学力の向上を図っていく必要がある。

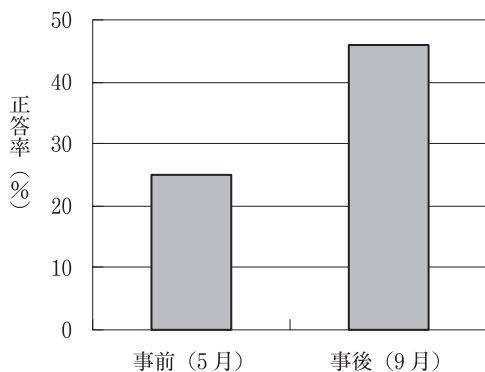


図10 一般常識テスト事前・事後比

### 3.2 個に応じた対応

多くの大学では、個に応じた学生への指導が困難なため、積極的に自分から活動することのできない学生は、誰からも適切なアドバイスを受けられないままに、自分が何をしたらよいか分からず、将来への方向性を見失うことが多い。また、学生の動機付けを高めるためには集団での講義ではあまり効果が期待できず、個別に対面でメッセージを訴える方が効果的と考えられる。

そこで、情報文化学科では、入学から卒業まで、必ず1人の学生に対して誰かが常に責任を持って指導し、アドバイスをする取り組みとして、半期ごとに個人面談を実施することとした。入学時に個人カルテとして面談票（図11）を作成し、1, 2年次は基礎ゼミナール、3, 4年次は専門ゼミナールの担当者が実施する。面談票は基礎ゼミナールから専門ゼミナールに引き継ぎ、学生が系統的な指導を受けることができる仕組みとした。

面談の目的は、就職への意欲を高めること、今何をやらなければならないかという目標を明確に

面談票				情報文化学科1年			
学籍番号	氏名	性別	生年月日	出身高校			
1年前期				1年後期			
面談日	月	日	面談日	月	日		
進路希望	1. 就職	2. 進学	3. その他	進路希望	1. 就職	2. 進学	3. その他
本学への入学動機				大学生活についての感想			
高校時代に力を入れたこと				単位取得状況			
将来どのような職業につきたいか				将来どのような職業につきたいか			
自分の特徴・趣味・特技について				自分の特徴・趣味・特技について			
今、不安に思っていること				今、不安に思っていること			
アルバイト状況				アルバイト状況			
担当書所系				担当書所系			

図11 個人面談票

させること、自分の考えを伝えるためのコミュニケーション能力を身につけさせることと、学生自身の悩みや不安を軽減してやることである。1, 2年生への質問項目は以下の通りである。

【1年生】

- ①入学動機
- ②高校時代に力を入れたこと
- ③将来どのような職業に就きたいか
- ④自分の性格・特徴・趣味など
- ⑤今、不安に思っていること
- ⑥アルバイト状況

【2年生】

- ①江戸川大学1年間の学生生活を振り返って
- ②単位取得状況
- ③将来どのような職業に就きたいか
- ④就職に向けて頑張っていること
- ⑤自分の性格・特徴・趣味など
- ⑥今、不安に思っていること
- ⑦アルバイト状況

1回目の面談実施後に、面談についての学生意識を調査したところ7割程度の学生が面談をしたことが良かったと高い評価をしている（図12）。面談についての自由記述を見てみると、ほとんどの学生が面談に対する好印象を述べている。内容を整理すると、「目標の明確化・就職への意欲の高まり」「不安や焦りの軽減」「教師との親近感」に分類できる。主な記述は以下の通りである。ほぼ大多数の学生が、この記述に加えて、今後も面談を継続して欲しいという希望を述べている。

「目標の明確化・就職への意欲の高まり」

- ・就職への意思が明確になった
- ・自分の将来の志望がある程度はっきりした
- ・就職活動に現実味が持て、自分の悪い点を改善しようと思えた
- ・自分がこれから何をやるべきかというアドバイスをいただいた
- ・自分が将来や就職についてどの程度考えているかが分かった

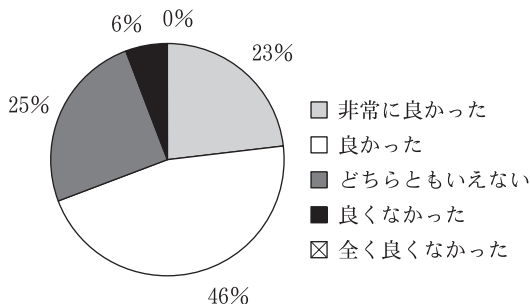


図12 個人面談に対する学生の意識

- ・企業や就職についての知識を得ることができた
- ・いろいろな職業があることが分かった

「不安や焦りの軽減」

- ・自分の不安や焦りが少し解消した
- ・自分を見つめなおすことができた
- ・自分のことを客観的に見つめなおすよい機会になった
- ・自分の長所や短所を自覚することができた
- ・自分の気持ちを正直に話せたので面談できてよかった

「教師との親近感」

- ・1対1なので話し易く、自分の心に余裕ができた
- ・今後も先生と話し合っ将来の目標を定めたい
- ・自分からは相談に行きにくいのでこのような機会があると嬉しい
- ・いざというときに相談できる人がいることが分かって少し安心した
- ・自分の将来について先生と親密に話をすることができたので本当に良かった

3.3 リーダーの育成

個々の学生の力を伸ばす視点と共に、学科全体の組織的な力を引き出すためには、リーダーの存在が重要である。リーダーが中核となって学科主催の行事を運営したり、他の学生の模範として活動を行うことによって、学科全体が活性化する。



写真1 リーダー会議の様子

それによって、リーダー自身の目覚しい成長も期待できる。そこで、情報文化学科では、学園祭イベントを運営するためのリーダーとして各学年から10数名の学生を選出している。

活動は、週1回の会議を中心に、イベントの企画立案、実施方法の検討、さまざまな準備を通して企画を実現、イベントの運営、評価などを行う。学生に責任を持たせるが、教員も指導のために立ち会い、組織を運営するために求められる視点、問題解決に必要な考え方、社会人になるために求められる能力などについて徹底的に指導する。

ここで育ったリーダーは、現在、学科の中核としてイベントの運営を成功させるとともに、さまざまな活動で中心的な役割を果たしている。後述するインターンシップでも、企業において目覚しい活躍をしている。

### 3.4 学内企業セミナーと企業講演会

専門性に応じた就職を実現するためには、早い段階で業界が求める能力や人材像を認識しておく必要がある。そのためには、3年生後期に就職活動を開始してから初めて企業の現実を知るのでは手遅れとなるため、学内に業界人を招いてセミナーや講演会を実施することとした。以下の企業が、情報文化学科の趣旨に賛同し、快くご協力くださった。

- ・株式会社 NHK メディアテクノロジー
- ・エー・アンド・アイシステム株式会社



写真2 企業講演会の様子



写真3 学内企業セミナーの様子

- ・株式会社 エム・オー・シー
- ・株式会社 ギガ
- ・スガノ農機株式会社

セミナーは、社会人としてのマナーを学ぶことも目的としているため、企業の方との名刺交換から始まる。その際には、教師が模範を示し、社会人として名刺交換をする場合のルールやマナーを解説する。参加する前に学生には名刺を作成させている。

主な内容は、「業界の動向」「企業の業務内容」「求める人材像」「社内での人材育成」「採用方法」「学生時代にやっておいて欲しいこと」などについての講義と、質疑応答である。事前に、学生に対して話して欲しい内容について打ち合わせをしているため、通常の就職セミナーとは違い、どちらの企業も情報文化学科の特性に応じた話をして



くださった。

学生は、企業の方の話を直接聞くことができ、業界で求められる力とは何か、社会に出て就職するために自分が今何をしなければならないかということを理解することができたようである。実際に、企業で求められる人材像、学生時代にやっておくべきだと言われた内容について、熱心にメモをとりながら傾聴していた。

### 3.5 企業見学

学内に企業の方を招いて話を聞くばかりではなく、実際に人々が働いている現場を見せて、職業に就くことの意味を考えさせる必要があると考えたため、教員の引率による企業見学を実施することとした。これには、就職活動を始めて、企業訪問をする際の事前指導という意味も含まれている。

見学にご協力くださったのは、明治乳業守谷工場であった。ここでは、「働くことの意義・苦勞」「商品開発のノウハウ」「ものづくりの工程でテクノロジーがどう活用されているか」「学生時代にやっておくべきこと」を講義と質疑応答、見学を通じて学ぶことができた。

学生は、実際に人が働いている職場を見学することによって、「働くこと」「商品を開発する」ということについて、さまざまなことを考えたようである。後日、企業見学についての課題を実施したところ、働くことの意義や、商品開発の工夫について多くの記述が見られた。それと同時に、教



写真4 企業見学の様子

員と一緒に企業を見学することができたことへの喜びも多く述べられていた。

### 3.6 インターンシップ

実際に就職活動を始める前に、職場での仕事を体験することは学生の就職への動機付けを図るために非常に有効であるため、夏期休業期間にインターンシップを実施した。以下の企業が趣旨に賛同してくださり、学生を受け入れてくださった。期間はいずれも5日間で、初日は教員が同行して挨拶を行っている。

- ・株式会社 NHK メディアテクノロジー (2名)
- ・株式会社 文化放送 (1名)
- ・日本建設工業株式会社 (1名)
- ・エー・アンド・アイシステム株式会社 (2名)
- ・株式会社 コア (1名)
- ・株式会社 エム・オー・シー (1名)
- ・株式会社 フジスタッフ (1名)
- ・株式会社 JCN コアラ葛飾 (2名)
- ・株式会社 リード・レックス (2名)

表2は、ある学生のインターンシップ中の作業日報である。このように、学生はインターンシップ先で、充実した経験をさせていただき多くのことを学んだようである。インターンシップ後の感想では、「礼儀やマナーの大切さ」「コミュニケーション能力の必要性」「業務に必要なとなる知識・技能が全く自分にないこと」「受け入れてくださった企業の方々、準備を担当した先生方への感謝」が面々と述べられていた。この活動によって、学生は大きく成長したようである。

## 4. まとめと今後の課題

本研究では、学生の人間力と、本人の望む就職を実現するために必要となる問題解決力を育成することのできるキャリア教育カリキュラムの開発を目指して実践を行った。

学生の資質を向上させる目的で実施した「基礎学力の向上」に関する取り組みは、ある程度の効

表2 ある学生のインターンシップ作業日報

8月4日午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・会社概要</li> <li>・情報システム部の方々への挨拶・5日間のスケジュールについての説明。</li> <li>・情報システム部の方々との顔合わせ</li> <li>・電話の取り方、保留時の注意、転送の仕方の指導</li> <li>・自分たちが使うコンピュータのセットアップ。初期設定、プレインストールアプリケーションのアンインストール、ウイルス対策ソフトインストール、Office 2003 のインストール、インターネットオプションの設定、Windows ファイアウォールの設定</li> </ul>
8月4日午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セットアップ作業。端末申請・認証、Internet Explorer 7 の設定、スクリーンセーバーの設定、フォルダオプションの設定、ワイヤレス LAN の無効化、ログイン方法の変更、Microsoft Update の実行、password.bat の実行</li> <li>・サーバールームの見学と説明</li> <li>・電話対応（内線のみ）</li> <li>・作業報告書作成</li> </ul>
8月5日午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NT ユーザが記載されたエクセルファイルと、在籍社員の名前が記載されたエクセルファイルを印刷し、比較し、社員名簿に名前が無い場合 NT ユーザにチェックを加える</li> <li>・電話対応</li> </ul>
8月5日午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・データマッチング作業</li> <li>・マウスの整理</li> <li>・協業社員として登録されているユーザの利用期限が 2008/4/1 より古いユーザデータの削除</li> <li>・リース PC を返却するためにハードディスク内全てのデータの削除</li> <li>・協業社員のメールアドレスの末字削除・リストアップ作業</li> <li>・電話対応</li> <li>・作業報告書作成</li> </ul>
8月6日午前	<ul style="list-style-type: none"> <li>・協業社員のドメインの添削作業の続きを行い、2人で分担して行ったファイルを1つのファイルにまとめる。</li> <li>・サーバールーム内にてリース PC の整理</li> <li>・リース PC の梱包</li> <li>・新しいリース PC のセットアップ</li> <li>・フォルダの共有の設定を自分たちで調査し、PC に設定</li> <li>・電話対応</li> </ul>
8月6日午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・Linux の体験 <ol style="list-style-type: none"> <li>1. Windows で作成した deluser.txt を ftp で Linux のサーバーに所得</li> <li>2. Linux 上でファイルの名前を変更</li> <li>3. more コマンドでファイルの中身の確認</li> </ol> </li> <li>・大手町にあるサーバールームの視察とサーバーの撤去、本社視察作業報告書作成</li> </ul>

果が見られた。今後はより多くの学生が、学力の向上に対して奮起するような働きかけを工夫する必要がある。

「個に応じた対応」として実施した個人面談は、学生からも教員からも非常に好評であった。将来への目標を明確にし、不安が軽減した学生が多

かった。教員が自分のことを考えてアドバイスしてくれるということに感激する学生が多く、この活動は継続的に実施する必要があることが明確になった。

「リーダーの育成」については、「インターンシップ」の活動とも連携しており、育成された学生が

さまざまな局面で活躍し、学科全体をリードする役割を担っている。これらの活動に学年間の縦のつながりを加えて、継続的に実施する必要がある。

企業や社会を認識させる目的で実施した「学内企業セミナー・講演会」「企業見学」「インターシップ」は、直接企業の方の話を聞いたり、指導を受けることによって、社会の厳しさ、企業の求める人材像を認識することができ、自分が今、何をすべきかということを確認することができるようになる活動であった。今後も継続的に企業の協力を仰ぎながら実施することが望まれる。

以上のように、学生の資質を向上させる目的と、企業や社会を認識させる目的で実践した活動では、概ねある程度の成果が得られた。今後は、基礎学力を向上させるための具体的な方策や、企業の求める人材を育成するために必要となる専門教育カリキュラムについて検討していく必要がある。

## 謝 辞

本研究にあたって、さまざまな方々の協力をいただいた。学内企業セミナー・企業講演会・企業見学・インターシップにご協力くださった企業の皆さま、活動を支えてくださった江戸川大学教職員の皆さまに心から感謝の意を表します。

## 参考文献

- 大学審議会（1991）大学審議会答申「大学教育の改革について」、文部省
- 文部科学省（2008）大学における教育内容・方法の改善等について [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/daigaku/index.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/index.htm)（参照日 2008. 11. 20）
- 文部科学省（2008）キャリア教育の推進について [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/career/05010502.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/05010502.htm)（参照日 2008. 11. 20）
- 那須幸雄（2004）わが国大学におけるキャリア教育の現状と動向，文教大学国際学部紀要，第15巻1号，81-95